

アジアで会う *Talking in Asia*



ピーター・ウンさん 自然史博物館館長

第157回 国家に依存せず独立経営貫く (シンガポール)

ピーター・ウン・キーリン 1960年、シンガポール東部生まれ。シンガポール国立大学(NUS)の教授で海洋生物学者。カニを中心に東南アジア地域の淡水性甲殻類を研究している。シンガポール唯一の自然史博物館リー・コンチャン・ナチュラル・ヒストリー・ミュージアムの創設者兼館長。米国式の経営方針を採り、行政の予算に依存しない独立経営を貫いている。



生物学者ですから、お金のことを考えるのはあまり得意ではありません。本来は「このカニカッコいい」「この昆虫すごく面白い」と、大好きな生き物を研究したいだけの人間です——。少しおどけてみせるピーターさんは、2年前からシンガポールの自然史博物館の館長を務めている。ほとんどが公的資金で運営される国内外の博物館や美術館と異なり、リー・コンチャン・ナチュラル・ヒストリー・ミュージアムは「ほぼ」私立の施設。博物館の展示物の選定やレイアウトはもちろん、建物の設計、設立のための資金調達、経営の全てを自分が中心となって行ってきた。

かつての博物館は強制的に閉鎖

ピーターさんが自立した経営を目指すのは、かつてシンガポールに存在していた博物館が、マレーシアからの独立後、政府により強制的に閉鎖されたという歴史があるためだ。当時の学者たちの尽力で、資料の大部分は保護されたものの、一部展示は失われた。「人々の暮らし向きが苦しいときは、どうしても芸術や科学は後回しになってしまいます。仕方がないことです」とピーターさん。

2000年代に入ると、経済的に豊かな国となったシンガポールは歴史や芸術など文化の振興に力を入れ始めた。NUSも大学の質を上げるよう努力し、学生、教員、研究、設備などあらゆるものを増やす方向に動き始めた。政府からは「美術館や歴史博物館はできた。あと足りないものは自然史博物館だ」という声が出た。

NUSの敷地内に自然史博物館を設立するという計画が持ち上がり、ピーターさんに白羽の矢が立った。当初は誰もが政府予算で設立されると思っていたが、

実際は政府の予算はないという。理不尽な状況にも、ピーターさんは「そもそも、政府の資金に依存していたからこそ、国の独立後に閉鎖を余儀なくされたのだ」と思い直し、自ら資金を集め、独立経営を目指すことにした。

金融危機のさなかに

最初の一步として、大学教員が資金調達した分と同額を政府が大学に寄付するという仕組みを活用し、ピーターさんが調達した資金と同じ額を政府が博物館に出資することを取り決めた。米国の大学や博物館で見られる制度で、政府が提供する資金は、「エンダウメント(寄付金)」として、利回りを目的とした長期投資に使われる。設備投資などの初期投資には使えないため、博物館を設立するにはピーターさんが自ら5,000万Sドル(約40億円)を調達する必要があった。

自ら資金調達に乗り出す覚悟を決めたものの、右も左も分からない。さらに時はリーマン・ショックが起きた08年。正直、企業から資金を募るには最悪のタイミングだったという。しかし、シンガポールに自然史博物館を復活させたいというピーターさんの思いはたくさん人の胸に響いた。リー・コンチャン財団など2つの大口の支援者が、それぞれ2,500万Sドル、1,000万Sドルの出資を決めてくれたほか、公営競馬運営のシンガポール・ターフ・クラブを口説き落とすことにも成功し、1,000万Sドルを獲得した。

最後の500万Sドルは、子どもたちから清掃員まで一般市民の寄付で達成した。1Sドルや50Sセントなど非常に小口でも、積もれば大きな額になり、また出資者の数が多ければ多いほど、一部の権力者による介入を防ぐのにも有効だ。

結局ピーターさんは金融危機のさなか、たった半年の間に5,000万Sドルの資金調達に成功した。それから7年かけて博物館を作り上げ、15年4月に開業した。

地元民がくつろげる場に

博物館は、中心部などの観光地から離れた南西部のNUSキャンパス内に立地する。ピーターさんは「観光客に来てほしくないわけではないが、まずは地元の人たちが自分の国の自然やその歴史を知り、誇りに思える場所にしたい」と話す。商売をするための施設ではなく、出資してくれたたくさんの市民のためにも、人々が自然史に親しみ、くつろげる空間にしたかったという。そのため、座って鑑賞できる展示を増やし、展示物を覆うガラスケースもできるだけ取り払うなど展示スペースの設計にもこだわった。

シンガポールの自然史博物館には、ピーターさんの自然と地元に対する愛がいっぱい詰まっている。(シンガポール&ASEAN版編集部・鈴木あかね)